

# 猫蓑通信

第78号  
平成22年  
(2010年)  
1月15日発行  
(年4回発行)



## いまこそ連句の時代

青木秀樹

新年おめでとうございます。

一九八二年に東明雅先生が主宰として猫蓑会を創設されてから、今年四月には二十九年目を迎える。連句復興に情熱をもって当たられた先生の遺志を継いで、猫蓑会会員がいまお活発に連句創作に励んでいることは喜ばしいことである。

ところで、現代の連句はどのような状況に置かれているかを考えると、室町時代、江戸時代とくらべて現在は極めて恵まれた環境にあり、後世に残る連句作品を作り出す基盤が出来かかっているように思われる。

百韻が正式な形式であった連歌の時代、その主たる担い手は貴族を中心とした有閑階級であった。俳諧が盛んになるとその主たる担い手は一部の武士と町人に変わり、主な形式も歌仙形式に変わった。その変化は文芸の担い手の生活環境に適応したものであると考えられている。昭和五十年代に復興した連句が現在に続いており、現代は社会的な立場とは関係無く、だれでも連句を楽しむことができる。室町時代や江戸時代の人々の暮らしと現代の暮らしをくらべると、生活範囲、交通手段、コミュニケーション

手段、情報量等のどれをとっても、現代人の生活が広く豊かであり、多様である。連句は連衆がこれまで生きてきた、すべての時間に見聞きしたこと、記憶を呼び覚まして作句する文芸であり、虚と実の空間に遊ぶことができることが特徴である。現代連句は現代人の生活を中心とする世態人情風交詩であるが、地球だけでなく宇宙まで、太古から未来まで飛ぶことができる。豊富な情報量により句材は多く、付句の発想の自由度は広がっている。変化のある作品が生み出される状況は整っていると見えよう。

また、連句創作の手法についても現代人は恵まれた状況にある。二条良基の『応安新式』をはじめとする連歌式目など、一巻のなかに同意・同想の詞や内容が繰り返されるのを輪廻といつて嫌い、「句数と去嫌」に関しては極めて厳重であった。貞門の俳諧も貞徳の『御傘』をはじめいくつもの俳諧手引書が刊行され、式目は重視された。芭蕉は俳諧入門書や式目書は残していないが、芭蕉の考え方は去来・土芳・許六・支考など教えを受けた弟子の書いたもので知ることができる。芭蕉は「たとへば歌仙は三十六歩也。一步も後に帰る心なし」(三冊子)と述べ、変化を重視したことが知られている。また余情付の手法を生み出し、形式より内容を重視した。式目については「差合の事時宜によるべし。まづは大方にて宜し」(三冊子)と述べているが、一方「式目(私に破らるる事は稀なり)」と「去来抄」にある。

連句遊戯説を廻って

東明雅先生を偲んで

東明雅先生七回忌追善正式俳諧

東明雅先生七回忌追善 二十韻十一巻

東明雅先生七回忌追善寄稿

土屋美郎 小林しげと 川野蓼艸

東明雅の想い出・上 東郁子・武井雅子

高瀬美保さんとの想い出 内田麻子

恋句の魅力——もつと二十韻を 永島靖子

大小について・歌仙「狸洗ふよ」 中林あや

薔薇祭 中田あかり

写真俳句と連句 由井健

事務局だより

東明雅  
磯直道

東明雅

東明雅

東明雅

東明雅

東明雅

東明雅

東明雅

東明雅

東明雅

東明雅

東明雅

私たちは根津芦丈翁、東明雅先生を通して蕉風連句を学んでいるわけで、本道を歩んでいると言える。明雅先生が「猫蓑会式目の整理を発表された時、「式目を新しく制定しようなんて大それた考えは毛頭ない。従来我々がやって来た方法を整理したままであり」と記されている。現在、私たちは余情付の手法をマスターして、かなり自由に変化を楽しむことができる。また「芭蕉、蕪村ほどの才能のある方は自由自在になさってもよいが、そうでない方は式目を守るのが無難である」とも明雅先生は述べられている。猫蓑会式目をノウハウと解して、その式目に則って巻けばそれなりの作品はできる。最後は、捌と連衆それぞれが現代人としての感性を磨き、現代の詩としての輝きが得られれば、よい作品ができあがる筈である。

今年も会員のみなさまの益々のご健吟を期待している。

## 連句遊戯説を廻って

東 明雅

平成二（一九九〇）年一〇月十五日刊

『猫蓑通信』創刊号より転載

「連句は要するに遊びだ」という説がある。私もそれは一面の真理だと思う。確かに連句は楽しい。尤も、楽しくなければこの忙しい現代に、誰が三時間も四時間も貴重な時間をつぶして、三十六句のひとつひとつに頭をひねり、一卷を作ろうとするだろうか。連句はまさに誰かも言った通り、最高の知的遊戯である。

だから、私は連句遊戯説を全面的に否定するものではない。まして、誰かが連句は全く遊戯であると信じ、そう主張することも否定しないつもりである。それは連句をどのように考えようとその人の自由であり、他人が干渉する余地はないからである。

しかし、その遊戯説の結果、結局は遊びであるから、式目など細かく言うのは野暮である。

## 東明雅先生を偲んで

磯直道

東明雅先生七回忌追善寄稿

1

先日、猫蓑会から明雅先生に因んだ会のご案内を頂いた。勿論参加させて頂くつもりであった

そんなものはいい加減にやって、とにかく、思いついたままを五、七、五なり、七、七なりで作って、前句に付け、三十六句出来上がれば大笑いして、めでたしめでたしで終る。これが連句なのだ、これが最高なのだというところまで発展したらどうなるだろうか。そのように発展する可能性が大きいので心配である。

野球と将棋、これは正しく現代の遊戯の代表的なものであろう。しかし、野球にしても正式のグラウンドで厳密なルールに従ってやるからおもしろい。将棋にしても、正規の盤の上で、正しいルールに従ってやってこそ最高の楽しみとなるものだ。どうせ遊戯だからグラウンドも盤もいい加減、ルールもでたらめでやるのは草野球であり、縁台将棋である。

だからと言って私は草野球や縁台将棋の楽しみを否定するものではない。ただ、草野球なり縁台将棋の愛好者が、正しいルールを生命とする本式の野球、将棋の存在と意義を否定するようになれば行き過ぎだと言うまでの話である。

明治・大正までの連句は、まだまだルールに

たが、全く申し訳ないことにどうしても当日時間が取れないことが起きてしまった。『猫蓑通信』の編集部から文を依頼されたのだが、その書き出しが言い訳とお詫びになってしまった。

ところで、学士会館で明雅先生追悼の会があったのがついこの間のように思われる。全く月日の流れの速いことには驚くばかりである。

忠実であった。昭和の初めごろから、俳人ではあっても連句は全く無知な者たちが、俳句を作る余戯として、連句に手を出し、芭蕉の作品をちよつと齧っただけで、大体このようなものだろうという安易な考えで始め、真の伝統を何も知らないものの流れが、平成の今日では連句界の大勢を占めている。連句は遊戯だから、式目などは無視すべきだ、楽しめばよいのだという連中も、多くはそれらの流派に属している。

まあ、それは時代の流れかも知れないし、他人がいかにルールなし、式目無視の連句を作ろうとも、それはその人の自由であり、その人たちの楽しみを奪うことはできない。奪おうとは思わない。

ただ、私は芭蕉が折角、芸術として完成し輝かしい七部集に示した俳諧の道を辿り、あくまで正しいルールは守って修業を続けて行こうと思う。そして、それが究極は、真に楽しい遊びの俳諧であると確信する。

○  
ご依頼の文を書くにあたって、その日に私が申し上げたことの繰り返しになるが、それで責を果たしたい。

明雅先生とは富山県井波で開催された国民文化祭連句大会に出席したとき、同じ部屋に宿泊するという栄に浴した。いろいろと話をさせて

頂いているうちに、

「明日の発句はもう出来ましたか？」

とのお尋ねがあった。先生も私も翌日の連句実作会の捌きを依頼されていたのであった。

「いや、実は井波が木の豊かな町と聴いていたので、御挨拶に紅葉の句を幾つか用意してきたのですが、全くオールグリーンで紅葉の句は駄目に成りました」

とお答えすると、先生は笑われて、

「やはり発句はその場に臨んでからでないとい良い物は出来ませんな。いくらご挨拶といつても」と言われた。

○

それから何年かたって私も停年を迎えた。定年後はもう少し連句に真剣に取り組もうと思っていたので、キザにも『はいかいし』という肩書の名刺を作り

「私も先生と同じように停年となりました」

と、それを先生に差し上げたところ

「ほう、これは面白いね」

と大笑いされた。前から思っていたことであるが、先生の笑顔は美によい。その時もつくづくとそう感じたことであつた。

○

後悔先に立たずと言われているが、先生に関する私の一番の悔いは、先生と一座する機会を得なかつたことである。氣後れせずに御指導を仰げば良かった。

改めて明雅先生のご冥福をお祈りします。

### 平成二十一年～二十二年 度 猫養会正式俳諧配役



宗匠 青木 秀樹

脇宗匠 原田 千町

副宗匠 近藤 守男

執筆 式田 恭子

知司 吉田 酔山

副知司 松島アンス

座配 根津 忠史

座見 秋山志世子

花司 林 鐵男

香元 鈴木 了齋

配硯 中川 凡

同 永田 吉文

老長 桶 文字



### 東明雅先生七回忌追善興行 正式俳諧

俳諧連歌

脇起二十韻 「喉走る」

喉走る酒が命やちちろ啼く

東の窓仰ぐ明月

明雅仏 郁子

一山はからくれなぬに染まりゐて

バスのハンドル緩急を付け

千町 文字

ウ 息合はせきびぎびと行く鼓笛隊

士官の姿凛々しきが好き

醉山 守男

日時計が傾くまでと契りしを

後引豆の辛さほどよし

久美子 暁巳

ちりりんと風鈴鳴つて止まる軒

吹き流しにも家紋くつきり

路子 忠史

ナオ 襲名を祝ひて贈る桐の箱

天津小湊鯛跳ぬる見ゆ

志世子 凡

高僧となるを夢みて学問し

ジュリアン・ソレル底冷の恋

淳子 了齋

冬薔薇投げて月下へいざなへる

猫集会に町中の猫

孝子 アンズ

ナウもつと良い暮しがあると信じをり

千代紙雛を飾るリビング

良子 佳之子

すすくと育つ若木は花をつけ

恩師を囲む惜春の庭

秀樹 執筆

平成二十一年十月二十一日 首尾  
於 江東区芭蕉記念館

1・穂高岳の座

脇起二十韻「終の栖」 川野蓼艸 捌

虫鳴くや終の栖の庭十坪 明雅仏  
 黄菊白菊思慕の七年 蓼艸  
 ひむがしに後の明月現れて 郁子  
 駱駝の群のゆつくりと行く 一枝  
 漠等の斜めになびく長き鬚 了斎  
 人魚もよけれ君のためなら 靖子  
 一所懸命自転車漕ぐ 斎  
 投網打つやうな視線にからめられ 斎  
 雪しんしん讚美歌響く杜の奥 郁  
 星の形に氷る湖 郁  
 ナオ 北の果友と地酒を酌み交し 郁  
 南蛮渡来のグラス磨ける 靖  
 つと現れて小田急線は轟と行く 艸  
 To be or not to be とは恋のこと 枝  
 捨てられた涙か汗か月蒼し 斎  
 慈悲心鳥の微かなる声 郁  
 ナウ ふるさとの昭和の家の昭和の香 靖  
 父は時計を日に一度巻く 斎  
 真行草の真で生きたし花の世を 枝  
 童たちにも菜飯進上 斎

連衆 東 郁子 西田一枝 鈴木了斎  
永島靖子

2・明神岳の座

脇起二十韻「新酒かな」 土屋実郎 捌

味はひは虚実皮膜の新酒かな 明雅仏  
 勧め上手のうるか鱸子 実郎  
 月明かし水平線に影曳きて 孝子  
 セールスマンのよく徹る声 榮市  
 図書館の右のベンチがお気に入り 恭子  
 彼女A・B鉢合せする 泉  
 雨に歌へばそぞろ哀しく 市  
 口づけのはじめ臉に触れしのみ 孝  
 寒鴉大きな羽でふんはりと 恭  
 南無観世音奈良の底冷え 孝  
 ナオ 初孫のつぶらな瞳愛でて居り 市  
 欲をかくのも若返る法 孝  
 密会の甘き蜜こそノン・モラル 市  
 恋の自慢をいつも床屋で 泉  
 砂の上鯉の烏帽子干上って 郎  
 祭のあとの月は静寂 恭  
 ナウ 剣道の稽古帰りの小学生 泉  
 かたびら雪を掌にのせ 恭  
 飛花落花山も麓もみな染まれ 泉  
 お揃ひの斑の戯れる猫の仔 孝

連衆 坂本孝子 佐藤榮市 式田恭子  
金子泉

3・燕岳の座

脇起二十韻「休肝日」 染谷佳之 捌

松茸が膳に香るよ休肝日 明雅仏  
 後の今宵は酒ありてこそ 佳之子  
 民謡を低く唄へば身に入みて 美奈子  
 黄色い帽子群るる園児等 淳子  
 剽軽で頑固な親父座る店 凡  
 世話女房は外つ国の人 吉文  
 好きなのは枕交はすといふことば 奈  
 寝技得意の議員引退 凡  
 あの影はもしやにつぼん狼か 吉  
 枯野に響く山寺の鐘 同  
 ナオ ロザリオを繰りてオラシヨをとなへをり 淳  
 核の不安はいよよふくらむ 凡  
 意地悪な距離を保つも恋の味 奈  
 青葉がくれにひしと抱き合ふ 淳  
 夜鷹鳴き月中天を渡りゆく 同  
 義経主従逃す関守 奈  
 ナウ 思ひ出のタイムカプセル校庭に 吉  
 就職列車それぞれの夢 凡  
 若木から育てし花の爛漫と 之  
 東風やはらかき海見ゆる丘 奈

連衆 鈴木美奈子 上月淳子 中川凡  
永田吉文





4・槍ヶ岳の座

脇起二十韻「とんぶりや」 鈴木千恵子 捌

とんぶりや座敷童子の笑ふ声 明雅仏  
 名残の月のかかる中門 千恵子  
 エコカーで美術展へと誘はれて 路子  
 腹を減らして帰る少年 志世子  
 地下道の商店街は賑やかに 明子  
 昔※ちやぶや草柳屋のかくてありしか 鐵男  
 長崎の土産にもらふネックレス 幸子  
 ヨン様よりもよか男ばい 路  
 あのことば短夜の夢走馬灯 明  
 みんなん蟬を聞いてゐる猫 幸  
 ナオダム工事ハブ空港など論盛ん 世  
 喜んでだけ居れぬ勝組 路  
 南米の大平原でよされ節 男  
 セニョーラの手のあかぎれを撫で 同  
 冬の湖ふたりの秘密月は知り 幸  
 をりふしに酌む百薬の長 世  
 ナウ極楽で正江・和子をかたはらに 路  
 春の通販買ひまくる人 幸  
 濃淡の花の彼方に富士を見る 千  
 コーヒー淹れるのどらかな午後 明

連衆 倉本路子 秋山志世子 森明子  
 林 鐵男 飯島幸子

※卓袱屋Ⅱ幕末、港で発達した瓦国人など相手の小料理屋。



5・常念岳の座

脇起二十韻「庭十坪」 松原弘佳 捌

虫鳴くや終の栖の庭十坪 明雅仏  
 後の名月揺るる蹲踞 弘佳  
 香り佳き松茸むすび分け合ひて 忠史  
 新作ゲーム競ふ少年 秀樹  
 ビーカーの対流じつと見つめる目 香織  
 偶然赤い糸の絡んで 碧  
 照れながら弾き語りする恋の歌 美友紀  
 アルハンブラの宮殿の影 織  
 身の丈を超す甲冑が並べられ 史  
 岩魚の酒でしたたかに酔ふ 紀  
 ナオ 楽屋裏※人間豹のうろつろつと嘘も方便政界の闇 樹  
 婚活に出しゃばりお米あらまほし 史  
 遊女の意地を見せる年の瀬 織  
 月寒くまとも逃した直木賞 樹  
 腰痛防止テレビ体操 織  
 ナウ山頂にいきなり巨大観音像 紀  
 つばくろの群宙返りする 史  
 停車場に訛聞こえず花吹雪く 碧  
 青春切符で巡る長き日 樹

連衆 根津忠史 青木秀樹 平林香織  
 松本 碧 奥野美友紀

※人間豹Ⅱ江戸川乱歩の作品。松本幸四郎、市川染五郎の親子が昨年初めて歌舞伎化し上演した。

6・南岳の座

脇起二十韻「虫鳴くや」 武井雅子 捌

虫鳴くや終の栖の庭十坪 明雅仏  
 籬に香る菊に射す月 雅子  
 赤い羽根ボーイスカウト並びぬて 有子  
 口に入れたるチョコ味の飴 曜子  
 上海へ地図を片手に独り旅 醉山  
 蠱惑を包む丈長の服 文子  
 トランペット納めて急ぐ君の部屋 文  
 神の前では神妙にする 山  
 滝の音聞えど見えぬ山の奥 有  
 無駄な工事は止めと迅雷 文  
 ナオ 紋所染師の技の詰め所 曜  
 酒は大関こみなから二合半に決め 山  
 がぶり寄る惚れた男の鬚の艶 曜  
 守られてゐることの幸せ 有  
 月を浴び番の鶴の舞ひ遊ぶ 文  
 快癒祈願に励む寒垢離 山  
 ナウ「もういいよ」柱の陰に声のして 有  
 体操チームメダルうららかに 文  
 師の愛でしこの郷の花咲き盛り 山  
 駿馬を御する春睡の夢 有

連衆 佐々木有子 前田曜子 吉田醉山  
 橘 文子

平成二十一年十月二十一日  
 於 江東区芭蕉記念館



7・大滝山の座

脇起二十韻「大道無門」 小林しげと 捌

俳諧の大道無門白枯梗 明雅仏

師資相承の文台に月 しげと

砂時計ものの音澄みし刻を得て わこ

CDよりもやはりSP 暁巳

ウ まだ来ぬか宅配便を待ちに待つ 昭

出番を縫つてちよつと逢引 達子

気に入らぬことが有つたらさう云つて と

例のお宿の部屋は「さざなみ」 わ

岡つぴき平次だお江戸突つ走る 巳

本町筋を西へ寒柝 昭

ナオ 年忘れ一言居士の幹事殿 達

いつ杯だけで赤くなるくち と

アラフォーは何がなんでも婚カツで わ

ヘア・スタイルを変へて妖しく 巳

涼風に顔出す月の雲間より 昭

木魚を鳴らし上げる法華経 達

ナウ すべからく人は手足を使ふべし と

若駒跳ねる夢のまほろば わ

みよしのの峰さまさまに花吹雪 巳

行く先々の径の囀 昭

連衆 小林しげと 横山わこ 島村暁巳

松原昭 篠原達子

8・蝶ヶ岳の座

脇起二十韻「ちちろ啼く」市野沢弘子 捌

ちちろ啼く古稀で始めし厨事 明雅仏

月へ供へる柚餅子栗飯 弘子

川筋に葦の穂先のゆらぎみて 常義

一帽を傾け測量の人 冬乃

ウ 朗々と祝詞をあげる地鎮祭 守男

深い溜息もらす婚活 靖子

デイトにはいつもピンクのラメルージュ 乃

アイスクリーム今はジェラート 同

故郷を仕舞ひては出す更衣 義

あやせば笑ふ初めての孫 靖

ナオ 銅メダル取つて五輪の夢なほも 乃

実験仮説検証の成る 義

豪華船寄港の町に拾ふ恋 乃

聖樹に寄りて永き口づけ 男

オンドルにねころんで見る窓の月 同

切り絵を貼りし軸のいろいろ 弘

ナウ 輪になって名残の宴の果てもなし 義

戦友会は燕来る頃 乃

エイジレスのチアリーディング花の下 靖

かたびら雪のとける肩先 義

連衆 生田日常義 百武冬乃 近藤守男

関口靖子

9・中岳の座

脇起二十韻「糸瓜かな」 峯田政志 捌

ぶら下がる外に能なき糸瓜かな 明雅仏

名残の月の慈しむ如 政志

秋味の旨き一皿賞でつらん 良子

デジタル辞書で進む検索 泉子

ウ 旅プラン世界遺産も取り込みて 遊民

きはどき意味も含む言の葉 鄭和

指先が覚えてゐるよ君のこと 泉

マリアの像を拝むこのごろ 良

あの夏を忘るまじとて長崎へ 和

入道雲の太る坂道 民

ナオ 雨を待つ人それぞれの傘の色 和

レトロが好きでLPを聴く 民

全共闘同志でありし君と僕 良

熱き抱擁雪洞のなか 同

越境の馬櫓の鈴に冴ゆる月 泉

母から娘へと赤きサラファン 民

ナウ ワクチンの接種の順序誰が決める 泉

きのふもけふも春日和なり 志

酒酌みて詩吟朗々花筵 良

米寿祝ひに来たる頬白 和

連衆 本屋良子 青木泉水 内田遊民

高山鄭和

10・赤岩岳の座

脇起二十韻「水の秋」 長崎和代 捌

水の秋昔深川橋幾つ 明雅仙  
 二夜の月を揺らす連 和代  
 小鳥籠デコイもそっと飾るらん 美恵  
 眼鏡買ひ替へ視界すつきり 士郎  
 名人戦先の先まで読み切つて 健  
 ウ メールは嫌ひ声が聞けない 如代  
 抱かれてたかまつてくる胸の音 あかり  
 切開しても残る刺青 美  
 木枯の渦巻いてゐる壼の内 士  
 父の好物鱒の照焼き 如  
 ナオ 菩提寺に若手ばかりの落語会 健  
 うすくぼんやり地口行灯 健  
 ゴンドリエアモーレミオを繰り返し 美  
 今宵限りと仰ぐ蠍座 健  
 汗ばみて赤い丸顔お月さま 美  
 なにかいちもつ骨董の店 美  
 ナウ ジョギングの代りに孫と幼稚園 美  
 朝寝の夢をいつまでも追ひ 同  
 ひとひらの花浮く盃を飲み干して 同  
 野原いつばい土匂ふ頃 代

連衆 山口美恵 横井士郎 由井健  
 伊勢本如代 中田あかり

11・乗鞍岳の座

脇起二十韻「水の秋」 高橋豊美 捌

水の秋昔深川橋幾つ 明雅仙  
 露時雨して小舟繰る笠 豊美  
 絵具溶く月光満つるアトリエに アンズ  
 ことりと側へ座る弟 千町  
 背表紙の配列で知る近代史 央子  
 ウ アントワネット今日もごきげん 國光  
 恋よりもスイーツが好きモチ娘 豊  
 山手線で化粧直せり ア  
 あの窓の夜毎に青く我招く 町  
 懐炉のぬくみ消えしころほひ 央  
 ナオ スカイツリーだんだん伸びて世界一 光  
 鬢付け油香る床山 豊  
 駒下駄の急ぎ足して前のめり ア  
 護送の手錠隠すハンカチ 町  
 月も砕けよ君と今宵の納涼舟 央  
 蝶々夫人愛の絶唱 光  
 ナウ 聖堂に涙を流すマリア像 ア  
 凡々の日々のどらけく過ぐ 町  
 花の宴酒旗翩翩と伊達若衆 豊  
 すまして通る耕しの牛 光

連衆 松島アンズ 原田千町 遠藤央子  
 飯塚國光

12・大天井岳の座

脇起二十韻「ぶら下がる」 青島ゆみを 捌

ぶら下がる外に能なき糸瓜かな 明雅仙  
 着たきり雀かがむやや寒 ゆみを  
 稀観本繻く手元月射して 久美子  
 町おこしとて板に命名 要子  
 ウ 埋め立てて次第に遠くなった海 将義  
 不思議な予感いふにないほど 英子  
 イケメンに声かけられる後から フミ子  
 和泉式部になつてみたいわ 義  
 つぎつぎと名残の空に映るもの 久  
 初動行の厳肅な様 英  
 ナオ 削つても増ゆる予算に動ぜざる 義  
 社長辞任に涙浮かべて 要  
 細君はデニムのベストドレッサー を  
 糟糠の夫あつさりと切り ミ  
 間違ひの恋の電話よ夏の霜 同  
 亀の子ずらり岸に並んで 要  
 ナウ 夢に見る介護ロボット我が老後 久  
 霞のやうに酔うて候 義  
 蒼穹を舞ひ急ぎゆく花の片 英  
 頬を染めつつ美人鞆 執筆

連衆 副島久美子 山本要子 川名将義  
 佐古英子 川口フミ子



平成二十一年十月二十一日  
 於 江東区芭蕉記念館

返済不能の借金  
土屋実郎

小林静司さんと一緒に柏の明雅先生のお宅に伺ったのは、芦丈先生三十三回忌の打ち合わせの時ですから、十年前の平成十一年のことと存じます。その折、猫蓑会が法要と追善俳諧のお世話をし、私共都心連句会が芦丈先生の作品集を担当しようということになりました。それで静司さんと二人で伊那の苧庵かまどに根津芙紗さんを訪ね、芦丈先生の作品を拝見させて頂くことになりました。

芦丈先生三回忌追善集『苧日記』の巻頭の写真に、文台の上に積み上げられた三千巻の連句作品をはさんで、根津忠二さんと清水瓢左先生が正座しているのがあります。私達はこの写真を以前拝見しておりましたので、胸の弾む思いでした。

作品集は特別製の縦野の入った和紙約百枚を二つ折りにして綴じたもので、毛筆で丁寧に書かれてありました。全部で五十数冊ありましたが、私達はとりあえずその最後の方の四冊、五十一巻から五十四巻までを拝借して参りました。この四冊は三十三回忌の折、祭壇脇に展示しましたのでご記憶の方も居られると存じます。

私は早速この四巻のコピーをとり、読んでみようとしたのですが、達筆なのと所々にくずし



字があり、どうしてもどうして全く歯がたちませんでした。それで直接ぶつかることを止め、迂回作戦をとることにしました。活字になっている芦丈作品を集めることにしたので。『この一路』、三回忌追善集『苧日記』、十三回忌追善集『踏青余韻』、『草原集』などに二百巻ほどの歌仙が活字になっていることがわかりました。

作品集第五十一巻が『草原集』と同時代（昭和三十八年）とわかり、この中の六作品が活字になっていることも判明しました。しかし、独りではなかなか抄かきがいきません。読めなければ作品集など出来る訳がありません。私も今年八十才になりました。何とかこの作業を進めたいと思い、同志をつのつて輪講形式で読み進んだらと気付きました。今年の七月三十日を第一回としてわが家を会場に始めました。

でも半日かかって歌仙四、五巻を読むのがやつとです。しかも、どうしても読み下せないところがあり、歯痒い限りです。月五巻として年六十巻、三千巻を読みこなすには五十年かかる計算になります。

そこで明雅先生、この借りは返済不能です。あの世でお会いしたら御教授下さい。

ちなみに只今の同志は、和田忠勝、高橋幸子、秋山よう子、久良木憲、生田日常義の各氏です。

先生の微笑  
小林しげと

先生がお亡くなりになって七年、その追善の会にお招き頂いたのは、大変お世話になった者として、有り難いことでした。ささやかながら先生のこといろいろ思い出されます。

○ 先生のお名前を知ったのは手探りで連句を初めて数年後、『連句入門』（昭和五十三年）、『芭蕉の恋句』（昭和五十四年）が出た頃です。私にとつて、これらの書物は実作上、闇夜の灯台でした。実際にお目にかかり、お近付きできるようになったのは、昭和五十七年、神楽坂の真清浄寺での芦丈先生の十七回忌のときです。当時、都心連句会に所属していましたが、ご著書を通して勉強させて頂いていました。その直後、お許しを受けて、伊那の芦丈先生の墓参を兼ね、苧庵かまどで連句の座に加わり、高遠を訪ねたりしました。そのときのお誘いにより、しばしば柏連句会に入りますようになりました。

会が済むと、有志は近くの小さなそば屋で肩を寄せ合って酒食を楽しみ、バスで帰る際、先生ご夫妻は必ず見送ってくれたものです。

柚子の盛りの季節に、皆と越生に遊んだとき先生は健脚で、吟行も遠足気分のようにでした。

○ さくら草連句会では、お願いして一方ならず



お力になって頂きました。平成十年秋、最初の

「連句を楽しむ会」では「連句のすすめ」と題する貴重なお話を賜り、その後、田島ヶ原さくら草観賞と水上バス吟行連句会や、浦和市恭慶館開設記念の連句会にも快くご参加下さいました。ちつぽけな会にご遠方より足を運ばれた先生の温かなご協力とご理解が、関係者にどれほど励ましとなり、活動の源となっていたか、思いを致しています。

○ 二十韻は、四・六・六・四行で序破急を構成、そのなかで四季を揃え、一花二月、ウとナオに恋句など設け、均整のとれた簡潔なスタイルの連句で、中途半端な半歌仙に比べて斬新な感じがして、私などは早くから親しませて貰いました。短時間内にまとまった作品が首尾でき、達成感もあります。これは先生の立派な連句的遺産です。こんどの七回忌に一同がこの二十韻を作り、ご供養することになりました。きっと先生はお喜びのことでしょう。

私たちの座は、「俳諧の大道無門白桔梗」という俳諧の本質を表した格調の高い、清澄な先生の発句を頂戴して、脇起の一卷を頑張つて付け運びましたが、位負けしてしまったのではないかと気になります。ともあれ先生の微笑が髣髴してきます。

○ 先生のお人柄に触れ、識見に授かり、ご恩顧を受けた同時代人のひとりであったことを私は、心から幸運に思っています。

東明雅先生七回忌追善寄稿

4

## 明雅先生の思い出

川野蓼艸

私は故中島啓世さんの紹介で昭和五十七年に、関口芭蕉庵の高藤馬山人先生の席で連句に入門致しました。今から思えば馬山人先生の働きは骨太で豪快な感じのするものでした。

先生の御指導に馴染んだ頃、啓世さんは、そろそろ、別な先生にも習った方がいいわよ、と言つて、私は同じ芭蕉庵で別な日に開かれていた明雅先生の会に連れて行かれました。

明雅先生の働きは優雅で繊細で、何か別な世界に来た様で、私は本当にここが同じ芭蕉庵なのか、と何度も天井を見上げたものでした。

私はカルチャー教室を経ないで明雅先生の弟子になり、謂わば居候の様な形で、猫蓑に三年間ほど在籍しました。

そのうち他の席で疑問が出てくると、式目先生、ここはどうすればいいんですか、と言われる様になりました。先生のお蔭で、人様の前で一廉の事が言える様になつていた訳です。

これも私の後ろにいらつしやる明雅先生に対する敬意の表われだったのだと思います。

常にかつたかぶりになつてはならぬと念じ、聞かれれば、この様に明雅先生から教わりました、と言う事になっています。

分らぬ事があると私はよく先生にお電話申し上げました。先生は嫌な御様子もなく何時も丁寧

に教えて下さいました。

すぐお答え戴ける場合と、それは一晚調べさせて下さい、と仰せになる場合があります。

一度、故村野夏生氏が、歌仙一卷巻き上げて、気が付いたら秋が一度だけ、三句しかなかったんだが、いいかねえ、と私に聞きました。

勿論、私に分る訳もなく、先生に電話致しました。この時も、一晚調べさせて、と仰せになり、翌日、芭蕉崩きの中、一卷秋一回というのが例外的にあります、褒められた事ではありませんが、秋一度だけでも許されると思います、と言われました。

七回忌の席で奥様にお聞きしたら、主人はパソコンはいじりませんでした、と仰いましたので、その晩、書物を全てお当りになったのだと知りました。気の遠くなる様な話ですが、先生の誠実なお人柄に改めて感じ入った次第です。

それから昔の人は百韻を巻くのの何時間位かかったのでしょうか、ともお聞きしました。この時も一晚調べて、と言われ、結局は

「電気がない昔は、明かりをとる事は大変でした。ですから大抵朝から巻き始めた様です。

定家は、燭を持たず、と言っています。つまり朝から始めて、夕方には巻き上げよ、という事でしょう。二条良基は、それではいい作品にならぬ、もつと時間をかけよ、と逆の事を言っています。」

との事でした。「燭を持たず」、こんな言葉がどこに載っているのか、お聞きしたくても叶わぬ事です。あ、先生、ご冥福を祈ります。

## 東明雅の想い出 上

東 郁子

武井雅子

**編集部** 明雅先生がお亡くなりになってから、早くも六年経ってしまいました。先生のお考えは今でもご著書などを通して学ぶことができますが、最近はお猫養員でも、直接先生に接したことはない方、それに追悼文集などお読みになっておられない方も増えてきました。そこで今日は、先生の日ごろの人となりといったことを中心に、お二方にいろいろお聞かせ願えればと思います。まずは、ご結婚された当初のころのことなどから。まだ明雅先生が松本にいらっしやる前で、先生は、大学を出られてすぐに松本に赴任されたわけではなくて、当時は東京にいらっしやっただけですね。

## 八王子から松本へ

**郁子** はじめは文部省（現・文部科学省）の宗教局保存課というところに入っただけです。それから旧制の東京府立一中（現・東京都立日比谷高校）へ移って、当時は八王子に住んでいました。結婚したのはそのころです。昭和十八年で、主人が二十八歳、私が二十三歳でした。

お見合いではじめて会って、次に会ったのは結婚式。戦時中でしたし、当時はそんな時代でした。十一月三日の明治節（現・文化の日）に挙式して、しかもそのあと翌年の三月いっぱいまで別居のままだったんですよ。私が熊本県立第一高等女学校の教

諭をしていて、担任もしていたものですから、学年末までは辞めるわけにいかなかったんです。

昭和十九年の四月からは私が八王子市立高等女学校（現・都立富士森高校）の教諭になって、やっと一緒に暮らすことができました。

二十一年の九月に、旧制松本高校（現・信州大学）に赴任して、松本に移りました。

**編** 先日の深川芭蕉庵の七回忌でのご挨拶で、明雅先生が各地のいろいろな図書館に嬉々としてお出かけになられたというお話をされましたね。信州にいらっしやっただころ、冬に明雅先生が夜中まで書き物をしておられて、そのうちインク壺が凍って字が書けなくなっただというお話を以前にも郁子先生からおうかがいしたことがあります。そのときも本当に研究がお好きだったんだなと思ったのですが。

**郁** インクが凍るといのはですね、昭和二十二年、二十二年ころです。そのころ松本の中心街に、もお医者様の家だったところをお借りすることができて、その当時としては珍しい洋館で、お部屋が沢山あったんですよ。主人は静かなところがいいと言いまして、二階の北の、南よりも北の方が落ち着くって言ってね、北側の六畳の部屋を自分の書齋にして。そこは寒いけれど、私たちは下の暖かいところで。まだこの子一人でしたそのころは。そしてまあ、よく勉強しましたね。そのころはまだ信州大学じゃない、松本高等学校でした。

松本高等学校に主人が行った次の年、二十一年に行って二十二年ですね、三年生の甲組というのを担任したんですよ。甲組というのは英語専攻で、乙組というのがドイツ語専攻なんです。町の真ん中で、あのころは学生さんたちがよく遊びにみえました。楽しかったですよ。

楽しかったけど、終戦後でしょう、何にも物の

ない時代で、何かご馳走してあげたいと思っても何もない、本当に今の方には想像も出来ないくらい何もなかった。結局お出しするのはお漬物みたいなものでね。それでも楽しくお話ししましたよ。

それで北杜夫さん、あの方がね、主人が赴任したとき三年生で卓球部のキャプテンだったんですよ。それで主人が卓球部の顧問をやっていたのもんですからね。

**編** 先生も卓球お上手だったんですか？

**郁** ええ、上手ですよ。

**雅子** 母も上手ですよ。今もします。

**編** すごい！

**郁** この人と一緒ときどき卓球場に行きます。

**編** そのころから先生とご一緒におやりになっただんですか？

**郁** いえ、それがね、主人と卓球したことは一遍もないんですよ。

**編** それは残念ですね。温泉の卓球なども？

**雅** 一遍もないことはないと思うんですけど。郁 一遍もということはないかな、でもあまり記憶にないですね、そのころは。まあ話を戻すと、卓球部の顧問で、その松本の中心街にあった大きな、もと病院だった西洋館から引越さなければいけなくなっただけありますね、そのときに北杜夫さんとか、そのほかの方々がいっぱいお手伝いに来てくださった。そのころの引越しというのはね、今みたいに自動車がないですから、荷車に荷物を積んで、そんな時代ですね。

**雅** 手で運ぶんですものね、みんなでよいしょいしょって。車なんて町に何台って時代ですから。道だつて車道じゃないからどこを通ってもいい。

**郁** 話が飛びましたが、その私が住んでおりました

所からね、信州大学、そのころは松高ですけど、そこから少し離れた上の方へ登ると農家が沢山あったんです。本当に物のない、食べる物もない時代ですから、私がリュックをしょって。そのころはまだこの人は赤ちゃんでしたからね、眠ったときに、主人が後を見ますから、私がリュックをしょって、家から二十五分くらいだったかな、そこまで行つて農家から薩摩芋を買ってくるんです。分けてもらつてリュックにしょつて帰つてきて、それで学生さんがいらつしやるとね、その薩摩芋をふかしてお出しすれば、もう上等のお茶菓子だった。そういう時代でしたよ、本当に。でも若いからそんなのちつとも苦にならない。

主人はそういう買い出しにはあまり行かなかつたですね。家で、この人が目が覚めるといけないから子守しているわけです。買い出しはもっぱら私の役目でした。

雅 何十貫しよつてきたつて言つてたわね。

郁 私のでしょ、主人じゃないわよね。何十貫つてことはないけど、八貫とか十貫とかくらいはしよいました。しよつて出来るだけ持つて帰らないと、食糧のない時代ですから。今なら想像もできない。

雅 お金で買ったの？

郁 ええ、お金で買ったから。そこらあたりの農家のお婆さんと仲良しになつて、昼間はね、若い人はみんな働きに出てから、留守番してるのは年寄りなんですわ。それでお婆さんと仲良くなつて、行くといつもね、お芋をわけてもらえた。

編 するとその間先生は、子守をしながら勉強しておられるわけですね。

郁 子守といつても、たいてい眠っている間に行きますから、あんまり手はかからなかつたと思います。もっぱら本を見て、勉強して。

### 貧しくても楽しく

編 学生さんがいっぱい集まるつていいですね。

郁 もうしよつちゅう見えてました。自分の担任だけじゃなく隣の組の方も見えてました。

雅 女装して来た方もいたりして。

郁 それがほら、あの先生、堤さん。お茶の水女子大の教授をしていた、もう辞めたけど、その人が松高時代ですね。もう一人の方が「先生、堤君のお姉さんが、堤君の進路について先生にご相談したいことがありましたので連れて来ました」つておつしやるんですよ。で、その女の子と二人で二階の主人の部屋に行つて、主人は「ああ、どうぞどうぞ」つて座蒲団を出してこう、すると堤さんと人はね、一言もしやべらない。そのうち主人が変だなあと思つたらしいんですね。そしたら堤さんが女装してね、顔もちやんとメイクしてね、そしてスカートはいてこうして。最初はわからなかつたわけですよ。

雅 昔の高校生はユーモアがあつたんですね。

編 ジョークのためだけにやつてるんですか。

郁 そうそう、もちろんそうです。それが自分の担任の先生のところに行かないで隣のクラスの先生のところにしよつて来るんですよ。

編 人気がおありになつたんですね。

郁 それで、その人達が帰るときに、主人が半紙いっぱいに大きく「押し売り、物貰い、堤、山中、お断り」つて書いて、こうやつて玄関に貼りだして。もうみんなで大笑いでした。

雅 ねえ、昔の高校生つていろいろなことでした。

郁 楽しかつたですよ。その、終戦直後つていうのは本当に今から考えると物のない時代でね、家へ見えるのにな、靴じゃないですよ。下駄履きでね、下

駄はいいでですけど、下駄の鼻緒の、前と横が切れて、一本しかついている下駄を履いて……。

雅 一本でどうやつて歩いてきたのか……。

郁 ねえ、だから切れた後は裸足で来たんだと思つたんですよ。それで、上がつてお話ししていらつしやるあいだに鼻緒を上げてあげてね、これだったら履いて帰れると思つて。そういうこともありました。そんな時代でした。物がなくなつて貧乏して。

編 そういう時代でもそういう冗談をやつてるつていうのがいいですね。

郁 それは、冗談つていうのか何て言うのか、学生さんは本当に楽しくつてね、よく遊びに見えてましたですよ。お茶菓子がなくて漬物だけつていうようなことがしよつちゅうでしたけど。

編 先生まだお若くて、学生さんと近かつたですね。

郁 そうそう、三十そこそこかな。三十か三十一くらいじゃないかしら。

編 その洋館にどのくらいいらしやつたんですか。

郁 そこはね、あなたがいくつだつたか。

雅 私があまり記憶にないから。写真で見ただけ。二、三年じゃないかしら。それから浅間温泉に引越したんです。

郁 温泉だから朝から晩までいつでも入れる温泉がすぐ裏にありましたからね。お洗濯なんかもみんなお湯でできましたでしょ、そういう点はとてもよかつたですよ。

編 結局、松本には何年間くらいいらつしやつたんですか。

郁 三十五年ですね。

(続く)



追悼 高瀬美保様

二十韻「夜長の灯」

内田麻子 捌

友の不帰諾ひえずに夜長の灯

麻子

アルペジオソナタ送る眉月

蓉子

秋薔薇高き香りのきりもなし

文子

版画展には人の賑はふ

碧

やうやくに気になる色を着こなして

弘子

憧れの恋秘めて忘れず

麻

タラップを降りるとそこは新天地

弘

草を食んでる羊点々

碧

炉辺に読むかの英雄の物語

文

イコンに跪坐する霜焼の手で

蓉

水問題は世界共通

碧

若妻は各地の塩を使ひ分け

蓉

青大将がねらふ蹊

文

月光の蚊帳の中にて影二つ

弘

巨人優勝シャンペンを抜く

碧

ナウ子沢山政府の手当あてにして

蓉

貯金通帳渡す卒業

弘

登り窯訪へば爛漫けふの花

文

前に後にてふのまつはる

碧

連衆 五味蓉子 橘 文子 松本 碧  
市野沢弘子

平成二十一年九月二十四日首尾  
於 五反田 房連庵

追悼 高瀬美保様

二十韻「カシオペア」

橘 文子 捌

俯や共に仰ぎしカシオペア

文子

月の出を待ち菊酒献杯

麻子

小学生案山子に声をかけつらん

蓉子

毬を蹴つたりゴムを跳んだり

碧

ウ ツーリング用鉄腕アトムのユニフォーム

弘子

行き止まり道実は抜け道

蓉

逢ふ時はいつも他人のふりをし

碧

アラフォー世代何処に落着く

麻

グリークの組曲流れ鯨鍋

弘

氷餅造る諏訪の湖畔に

麻

ナオ 痛めたる膝を治して五輪へと

碧

お荷物となる地方空港

蓉

新設の植込に来る群雀

麻

出あひ求めてひがなメールす

蓉

祭笛淋しい男月を浴び

碧

竹夫人抱き夢の果なし

弘

ナウ 居ながらに天下の銘菓食べる会

麻

窓辺に寄れば霞む高層

碧

爛漫の花の御苑を廻りたり

弘

春嶺た穩し版画作品

蓉

連衆 内田麻子 五味蓉子 松本 碧  
市野沢弘子  
平成二十一年十月二十九日首尾  
於 五反田 房連庵

高瀬美保さんとの思い出

内田麻子

九月二十一日月曜日、高瀬美保さんのご主人、隆様よりお電話で「……昨日他界いたしました」と伺ったときは、言葉もなく立ちすくんでしまいました。実に長い長い月日の友人。

女学校一年生十二歳のときから、組替があつても同じ組で、学徒動員の住友通信も同じ部署。昭和二十年の卒業式の後はお互いに東京を離れ、美保さんは満州のご家族の許へ行かれ、終戦、引揚のご苦労に会つておられます。私も長野市に暮らし、級会が復活して四十四年頃からは首都圏に戻り、お互いに短歌結社に属していることなどから交友が深まりました。朝日カルチャー連句教室にもお誘いして連句仲間となり、五十九年の一月式田邸で式田和子さんと美保さん、麻子の膝送り三吟が一座した記録のはじまりで、連衆としてのお付合の何と二十五年にもなつておりました。殊に近年、梶が谷房連庵ではAとB月二回の集りに来ていただきました。

伊豆の河津桜も三回ご一緒しましたね。私の方が先に歩行不自由となり、何時も細々とした事どもをカバーしていただく日々でした。

八月末お腹の中の腫瘍を手術なさる決心をされ、お電話で私の母の体験などお話しして、一回目の手術は順調に……しかし二度目の手術を受けられ、お苦しい日々であったとお察しするばかり、お目にもかかれず、この世を離れてしまわれたのです。

私の転居した五反田房連庵を見届けていただいた六月二十五日の会が、美保さんとの最後の連句の座となつてしまいました。

その日の、お変わりもなく、お元気でやさしかったお姿を、私の生きているかぎり忘れず、残り少ない連句の座を共に続けたいと思つております。



恋句の魅力——もつと二十韻を

永島靖子

風鈴をひねもす聞くや休肝日 明雅

藍深まりしあぢさゐの穂 靖子

これは明雅先生の発句に付けた私の生まれてはじめての連句作品。昭和六十二年六月一日、杉並区立四宮集会所においてのことである。この程たまたま、連句関係の昔の紙片の中から見つけたもので、この時、先生は四回に亘り「連句実作入門講座」を杉並まで出向いて持って下さったのである。信州大学教授時代の先生との面識は、所属する俳句結社の関係で多少あったけれど、この時を契機に先生を連句の師と仰ぐこととなり、式田和子師とのご縁も出来たのであった。

ところで、二回に分けて巻かれているこの「風鈴」は二十韻。当時、先生は二十韻という形式の普及に力を注いでおられたのであろう。手許にある『新炭俵』には、昭和六十年からの作品が収められている。

その後、式田邸（桃径庵）で巻くのも、おおむね二十韻であった。夕方から始めるのには適した長さと思うが、最近ではなぜか半歌仙の方が多くなっている。例の国民文化祭への募吟のためと思うけれど。そのようなことで、先般の

明雅先生七回忌追善興行における二十韻は、本当に久々の感じでなつかしいものであった。時間と能力が許せば歌仙に如くはないだろう。しかし、半歌仙ではいつもあき足りなく感じて来た。何としても半分なのである。途中で終わってしまうのである。

ここでいきなり私見を述べてしまうと、中途感の何よりの理由は、恋句が半歌仙では一個所しかないからである。月花と並んで一卷の華と言えるのは恋である。その情意を尽くした人の心の機微や華やぎが、他の風景や人事句の上にも及び、一卷を魅力的なものにする。歌仙を絵巻物にたとえるなら、二十韻は一双の屏風と言えよう。ぱつと拡げて左右を見渡すと、それぞれの中程に恋句が二本の艶なる柱のように立っている。

例証として、ここで先述の四宮における講座の作品から引いてみよう。昭和六十二年八月二十四日明雅先生捌きの一卷からである。

裏 秋の薔薇をそつと贈られ 隆秀

蝸を哀しと聞きて逢ひ難し 靖子

名残表 分別の盛りにぐつとわしや迷ひ 和子

女難剣難水難の相 好敏

裏の恋は成就の趣には遠く、静かな純情の世界であり、それに対比して名残の表となると、俗とも言える措辞を持ち出してはげしく燃える

恋となつている。今一つ、明雅先生の一直を得ている三吟の二十韻から挙げてみる。平成元年四月二十四日首尾。

裏 香水の香で知れる商売 靖子

方丈へ導く僧のあどけなく 孝子

名残表 抱いて抱いてとせがむ十五夜 和子

ざつくりと石榴の割れて燃ゆる恋 靖子

ここでも、裏は僧などが出てひっそりとし、名残ではよりはげしくなっている。裏と名残との間で、一方が古風で他方が現代風であるとか、風情に強弱や明暗の差をつけるとか、その辺の付けの呼吸の差が大変面白い。屏風の左右で趣の違う点が見所であろう。

明雅先生には『芭蕉の恋句』という名著があり、芭蕉の濃艶な恋句の魅力を語り、現代詩にも通じる文学性の高さを論じておられる。そのような点も併せ考え、恋句には経験と感覚を昇華した物語的虚構の美があると思う。連衆の一員として恋句の魅力をさまざまに楽しめる二十韻がもつと興行されることを明雅先生を偲びつつ願っている次第である。

それにしても、先生の温容と作品の端々にまで及んだご指導のこまやかさをあらためて思い出し、先生の連句に寄せられたお気持の深さに今も心打たれている。



## 大小について 中林あや

富士山はまさしく日本一のお山である。しかしながら見えたり見えなかつたり、かなり気まぐれでもある。富士山がよく見える日は訳もなく幸福な気分になつたりする。

### ●静岡国民文化祭 裾野市連句大会へ

平成二十一年十月三十一日(土) 薄曇

「今日は富士山はいないだろうな」と頭の中で思う。案の定、秦野のいつも富士山の浮かんでる辺りは茫茫として単なる空であつた。

昼の裾野市は違つていた。まずだんだん晴れてきた。寒いかと思つたのにやたらに暑い。剥ぎとれるものはみんな身体から剥ぎとる。毛糸の帽子などは行方不明になる始末だ。

「あつ、富士山だ」やたらでかい。ぬうつとというか、もあつと、むうつと、すつくと、ふあつとなどなど色々並べてみたが、いづれも少し違う感じがする。ともかく屹立している。

吟行会は「富士山麓散策コース」理由はわからないうが、貴重な午後をわただけ誰も知り合ひのいなバスに乗れと言う。連れとは別々に。私は屹立どころか背中をまるめ、やむをえず孤独状態に落ちた。初めてお会ひした裾野の富士山を絶えず右に左に正面に背後に見ながら、疲れのようなものが徐々に溜まつてくる。裾野の富士もどうやら孤独そのものに見えた。仕方がない、吟行会だから吟行でもするか……

逝く秋の富士のどでかい孤独かな

あや

夕日に染まる富士も、自衛隊演習場の芒の夕暮れにぼんやりと浮かぶ富士の影もあいかわらず巨大であつた。夜は雨となつた。

十一月一日(日)富士山は裾野市のどこにもいなかった。そしてわたしたちは帰りの電車を二時間近く早め、そそくさと帰路についた。

「あした晴れたら秦野でね」と見えない富士にささやいた。

秦野では、天気の良い日、特に寒い朝には必ず富士が見える。すつきりとしなやかな姿がゆかしい。あの大きな富士がすぐそばにある暮らしも勿論悪くない。むしろ得難いし素晴らしい。幸福感も大きいものだろうと思う。それでも秦野に移り住んで七年余り、ちんまりと暮らすわたしには、程よく空に浮かんでる中ぐらゐの富士山が好ましいこともまた事実である。

他人の持つているものを羨む事もある、もつと広い家に住みたいなどと思う。もの忘れもしたくないし、まだ死にたくもない。一点差で高いところに上つたりする娑婆つ気だつてたつぷり。どうも度し難いバーサンであるくせにだ。

初富士や秦氏の町の神さびる

あや

七歳になる孫娘に富士山に逢つてきたというとき、自分も逢いたいという。

「二階にいけば逢えるよ」「ウソオ」

まだ朝のうちのこと、パパを起こさないように二人とも忍び足で二階へ上る。ペランダにでると、愛らしい富士山がある。

「ネット」「ホントだね」自分の家から富士山が見えるのを知らないなんて、信じられないが、別に見えても見えなくても彼女の幸福には何の関係もない。富

土山は大きくても小さくてもきつと日本一。そして中ぐらゐの富士山に、いまわたしの幸福はちよつぴり左右されている。

### 第二十四回国民文化祭・しずおか二〇〇九

文芸祭連句大会 静岡県連句協会会長賞 受賞作品

### 半歌仙「狸洗ふよ」

中林あや 捌

店先の狸洗ふよ弥生尽

ころりと水を弾く石路

あや 美恵

グラビアは春のコートの特集に

おしやれなピアスつけてみようか

あや 美恵

新涼の窓をあければ青い月

紫蘇の実しごく小作りの母

あや 美恵

電池入り案山子やたらと首を振り

富士の裾野を飛行船ゆく

あや 美恵

もう欠伸番台にある午後三時

少し押へた咳の謎めき

あや 美恵

雪催ひもつともつと抱き寄せ

恋のツボならその紅いところ

あや 美恵

手を外し手観音修理中

涼み浄瑠璃月の夕べに

あや 美恵

ギムレットお忍びらしいサンガラス

犬にも分ける好きな生ハム

あや 美恵

花しづか潮の匂ひの満ちみちて

朝市の立つ島のうららかに

あや 美恵

連衆 山口美恵

平成二十一年四月八日 首尾

於 山口邸

## 薔薇祭 中田あかり

ルーマニアとブルガリアの茫々たる葦原を分けて、スリナまで達したドナウ河は黒海を終着点とする。その流れにかかる橋の中心が国境だった。観光バスは簡単な手続きでブルガリアに入国した。カザンラク（バラの谷）と呼ばれるバラ栽培の宏大な土地。直径八センチぐらいの濃いピンクのバラ畑が広がっていた。フランスで香水の原料となるバラ油は約七〇%から九〇%をここから輸出している。

いざ薔薇祭に参加の旅行記である。ホテルの横玄関の前の大きな円形広場が薔薇祭の会場である。

食後のヨーグルトを食べ終え、ガイドのナダラと一緒に出了。ステージを囲み、人種の人垣が出来ていた。あまりの観衆の多さに仲間達はばらばらになってしまった。私は人垣のうしろに立った。雰囲気を楽しむ。風も人も言葉のひびきも外国である。薔薇祭は薔薇の女王を決める祭りである。遠くから馬車の音が近づき会場に到着したらしい。耳と鼻が感じられる凡てだった。

私の前に立っていた大男がチラチラと私を振り返る。女性と三人連れで、お揃いのアロハを着ている。私は男の肩に届かぬ程小さい。だがもう人の目を気にする年齢ではない。長い旅路の薔薇祭。私は漆黒の空を眺め会場に浴けこむ。

突然、男が大声で演説をはじめた。意味はわからないがブルガリア語らしい。すると私の前の人々がさっと左右に分れて、私の前に道が出来た。男は手振りで前に行きなさいとしきりに奨める。旧約聖書の中の海が割れた瞬間が頭によぎった。私は彼の演

説を理解した。「この小さな異邦人に我々の薔薇祭を見せようじゃないか」と。びっくりしながら男に会釈して、一番前に出た。男の優しさに胸がいつぱいになった。

新しい薔薇の女王に選ばれた娘が馬車から降りた。前女王が縫い取りの美しい白いガウンを娘に着せ、冠をかぶせた。かん高く澄んだ新女王の宣言。わあっと起る歓声。ああこれが薔薇祭。飛行機に乗りバスに乗りやって来た薔薇祭。真っ白な馬車と馬が舞台の下で大人しく姿勢良く立っている。胸の中に幸福感が溢れた。ひとつひとつの出来事にどつと沸く観衆。世界中が集まったような感覚がする。円形広場の最前列の手摺りにもたれて、眼からも皮膚からもお祭りを吸い込んだ。青や赤の花火があがる。心の中で「玉屋！」

## 写真俳句と連句

### 由井健

趣味で始めた写真に俳句を付けてホームページに掲載し始めてから十年程になります。当時写真に俳句を付けて写真俳句（以下写俳と略す）として作品を公に出されていたのは、俳人の伊丹三樹彦氏ぐらいだったでしょうか。二〇〇六年に推理作家の森村誠一氏が「写真俳句のすすめ」という本を出され、ご自分のブログで作品を発表されたり、一般の人々から応募を募ったりされてから、随分と写俳のファンが増えました。その時流に乗り、二〇〇九年にNHKが「フォト五七五」という番組を放映し始めてからは更に流れが加速されました。今では一般の俳句誌にも「写俳」というページが設けられるようになりました。

気付いてホテルに戻るとナダラが大きなドアの前に立っていた。

「お客様をおひとりにして申訳ございません。皆さまは見られなかったと言われて、部屋におもどります。」

私ひとりのために待っていてくれたガイドのナダラ。彼女は本当に美女である。こんなに美しい人は見たことがないと思われる程だ。でも四十過ぎたらヨーグルトのせいで肥るのかしら。

「有難うございました」私はナダラにそう告げて部屋にひきあげた。素敵な私の薔薇祭。

薔薇祭甘き香青き香花火の香 あかり

(注) ナダラは今、東京の大学で勉強している。

写俳とは簡単にいえば写真に俳句を付けたもの、或いはその逆ですが、良い写俳というのはなかなか難しいものです。写真だけが良くて駄目ですし、俳句だけが良くて駄目です。両方良ければ満点かという点必ずしもそうではありません。写真と俳句がお互いに響きあって更に深い味わいを出す事が必要です。それは良い俳句に似ているかも知れません。絵と俳句が直付けではないけませんし、また離れすぎてもいけません。

元々写真と俳句とは良く似た考え方で作られています。それは、

(一) 時間を切り取るという事

写真は決定的瞬間を撮る事が大切です。カルティエ・ブレッソンの、水溜りを今まさに飛越えている人を写した有名な写真があるように。

俳句もまた「何が何して何とやら」(次ページへ)

(前ページより) というように経過をだらだらと説明するような句は嫌われます。

(二) 空間を切り取るという事

写真も俳句も余計な枝葉を切り落した、いわば引き算の空間の表現が好まれます。美しいものをあれもこれも入れようとした絵葉書のような写真、俳句は好まれません。

ところで私が連句を始めた理由ですが、連句の付け方が写俳、俳画の付け方に参考になると思つたからです。

連句の前句に対する付句の付け方には、物付、心付、余情付があるようですが、写俳や俳画にも余情付の句や響付等の付け方は大変参考になると思えます。連句を始めて日も浅いので、七名八体等どう活用したら良いか分かりませんが、おいおい理解を深めて応用して行きたいと思えます。

また、連句をやつて勉強になった事は「場」の句と「人情」の句があるという事です。私の写俳は今までは花鳥風月を中心とした場の作品が多かったのですが、これからは人情の作品、特に恋にからんだものも面白いかと思つております。

なお、私のホームページは、  
<http://www.2u.biglobe.ne.jp/~yui>  
です。お暇なときに覗いてみて下さい。

歌集

ジャダ

藤原龍一郎

平成二十一年十月二十日 刊

短歌研究社

定価三一五〇円(本体三〇〇〇円+税)

## 事務局だより

●今後の予定

・平成二十二年猫蓑会初懐紙  
一月十七日(日)

十二時〜十七時(受付十二時より)

於 ホテルフロンション青山

港区南青山4・17・58

TEL03・3403・1541

・平成二十二年亀戸天神藤祭正式俳諧

四月二十五日頃

●猫蓑基金にご協力ありがとうございます。

亀戸天神社 大鳥井武司様・一万円

川野夢艸様・一万円

基金口座 みずほ銀行新宿新都心支店

猫蓑基金 普通預金 3376045

●新会員 伊藤則子(俳号・八千代) 横浜市栄区在住

●俳号変更 松原弘子↓松原弘佳

●住所変更 古藤瞳 多摩市より練馬区へ移転

●退会 吉村えみこ 八角澄子

●DVD、ビデオテープ

・平成二十一年十月二十一日東明雅先生七回忌興行を映像に記録しました。DVD、ビデオテープを

ご希望の方は事務局までご一報下さい。

●猫蓑ホームページ会員ページ

・会員ページ収録の猫蓑通信バックナンバーについて、第七十七号からファイル形式が代わり、文章をコピー&ペーストできるようにしました。引用などの際にご利用下さい。

●訂正

・前々号(第七十六号) P2「第三の留め」

十二行目「『かな』という動詞」↓「『かな』という助詞」

・前号(第七十七号) P2「季刊連句」発刊の辞「四行目「衰微」↓「衰微」

句集

袖のあはれ

永島靖子

平成二十一年九月二十二日 刊

ふらんす堂

定価三〇〇〇円(本体二八五七円+税)

季刊 『猫蓑通信』第七十八号

平成二十二年一月十五日発行

発行人 猫蓑会 青木秀樹

〒182・0003

東京都調布市若葉町2・21・16

編集人 猫蓑通信編集部

印刷所 印刷クリエイト株式会社